

## 石の俗称

# 巨獣と石(その1)

加藤 碩一<sup>1)</sup>・遠藤 祐二<sup>2)</sup>

### 1. はじめに

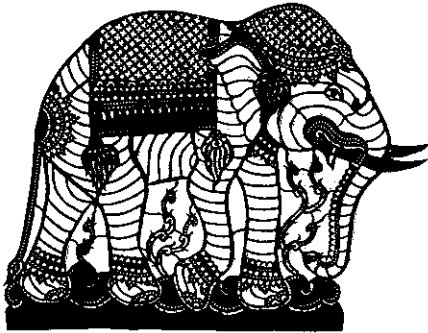
今は昔、「大きいことはいいことだ」というチョコレートのCMソングがありました。また、逆にお前は顔や態度がでかいなどといわれのない(?)中傷を受け、筆者らの小さな胸を痛めたこともありました。それはともかく良いかどうかは別にして、動物と石の世界にも巨大なものあるいは巨大なものに困んだ岩があります。今回と次回でその代表として象と鯨を中心にながめてみましょう。特に象は洋の東西を問わずいろいろなモチーフとして利用されなじみ深いものですし(第1図)、鯨は日本人にとってはいうま

でもなくですし、アメリカのメルヴィルによる小説「白鯨」はマッコウクジラがモデルで有名です。もっとも、最近の調査では若い人で鯨肉を食べた経験のある人は少なくなっているようですが、ともあれ、巨大動物と石に関わるよしなしごとをご堪能ください。

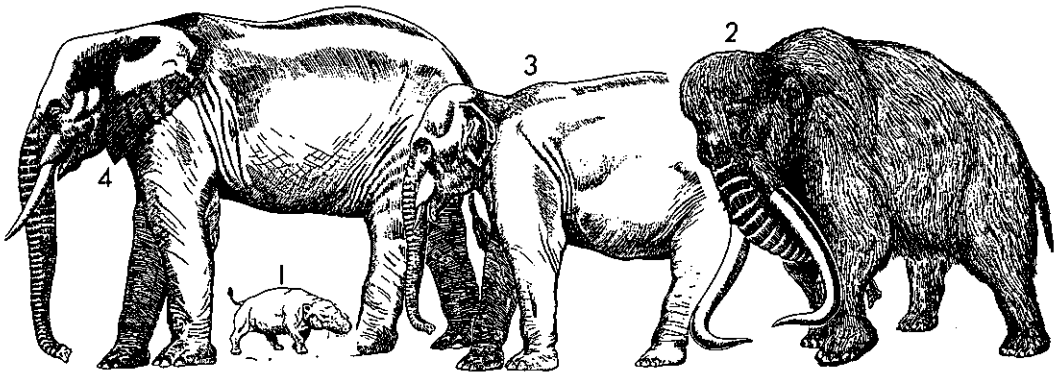
### 2: 象とは

「ゾウ」という言葉は英語の「エレファント」(elephant)に対応します。「エレファント」は、牡牛を意味するフェニキア語の「エレフ」あるいは「エレプス」、ヘブライ語の「エレフ」「アレフ」「オリフント」に由来し、本来現生の象、すなわちアフリカゾウとアジアゾウを意味する生物学的な概念です。これを長鼻類として知られる化石ゾウのどの範囲まで拡大適用できるかというのは実は定説がなく、研究者間には認識の相違があるのが現状なのです(亀井, 1991)。

まあ、そういう厳密な話はおいとくと、いうまでもなく陸上に棲息する最大の哺乳動物に属する長鼻目は象ですといえるでしょう。この長鼻目の進化における主傾向はなんといっても体重の増加にあります。最も古い祖先型とされる新生代第三紀始新



第1図 象をモチーフとした切り絵(チェンマイ, タイ)。



第2図 象の体躯の比較(1.モエリテリウム, 2.マンモス, 3.インド象, 4.アフリカ象)(Paleo-Arts Pub., 1992から編集)。

1) 産総研 地球科学情報研究部門  
2) 元産総研 地質標本館

キーワード: 象, 石の俗称, 象岩

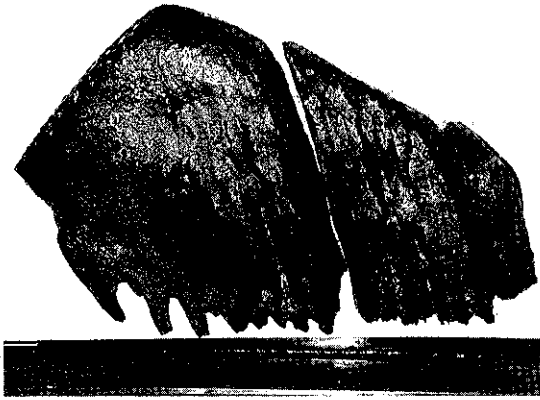
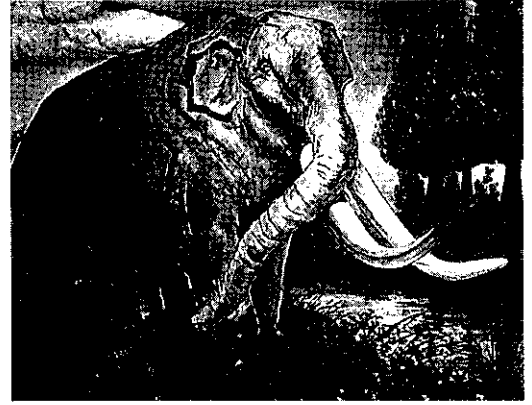


写真1 つくば市花室川で発見されたわが国最大級のナウマンゾウの歯の化石(地質標本館)。



第3図 シンシュウゾウ復元図(長野県戸隠村地質化石館パンフレット)。

世のメリテリウム属の体重は約200kgなのに対して新生代第四紀更新世の最大の象の体重は約8tに達し、現在のアフリカ象でも平均すると約6.5tあります。わずかに5,000万年のうちに約33～40倍にもなったわけです(第2図)。筆者らの家庭では、結婚後数10年間を経ても、連れ合いの体重は当初の2倍以下と推定されますが、詳細は極秘となっております。

このように体躯が巨大化した象はどうして生きのびることができたのでしょうか。まず体熱の放散の問題があります。体積は長さの3乗に、表面積は長さの2乗に比例して増加しますので、いかにして放熱面積を増やすかというわけです。この答えがあの大きな耳です。ご存じディズニーの小象ダンボはこの特徴をデフォルメしたものです。もちろん現実には象が耳をいくらばたばたしても飛べるわけではありません。

次に運動能力です。足の長さや太さの増加によって体躯を支え、かつ大きな歩幅によってかなりのスピードで移動できるのです。象の暴走シーンはよく映画などで見られます。また、象の歯は化石として良く産出しますが(写真1)、その寿命は長くまた何回かうまく生えかわるので大量の堅い草を捕食し、体を維持することが可能だったのです。

さて、象は約2,500万年前頃までアフリカで栄えていましたが、その後ヨーロッパとアジアに広がり、さらにコロンブスよりはるか以前にアメリカ大陸へと歩いて進出し、更新世には地理的に隔絶していたオーストラリア以外の地域に分布するようになりま

した。

日本列島では象の化石産出層準を、最近では下位から(1)シンシュウゾウ帯、(2)アケボノ象帯、(3)シガゾウ帯、(4)トウヨウゾウ帯、(5)ナウマンゾウ帯に区分することが提唱されています。シンシュウゾウ(第3図)は、鮮新世のかなり早い時期に日本列島に出現していたようです(樽野, 1999)。もっとも古い象化石は岐阜県から産出した中新世のアンネクテンス象だともいわれています(森下, 1979)。こうした長鼻類は、日本の脊椎動物化石の中でも最も多く産出しており、いわば、日本の代表的古生物であるともいえます。国内の多くの博物館でもその骨格ないし生態復元が展示されています(第3図)、長野県の野尻湖ナウマンゾウ博物館のように館名にもなっているところもあります。化石ゾウの骨格復元あるいは生体復元のある日本の博物館のリストは例えば亀井(2000)を参照してください。各地で見学できます。

### 3. 象にまつわる話

象といえばインドとアフリカです。約5,000年前に家畜化された象はインドが生んだ2大宗教である仏教とヒンズー教において常に重要な地位を占め、多くの伝承・説話のたぐいが生じました。インド神話では亀とともに宇宙を支えるとされ、その象は方象(ディッガジャ)と呼ばれ、4ないし8頭が東西南北の4方位ないし8方位を支えていたことになっていました。さらに、後代には配偶者たる雌象もあて

がわれ都合16頭の方象が世界を支えることとなりました。また、王の乗り物さらに神の乗り物としてその役目を果たしてきました。例えば、東を守る方象「アイラーヴァタ」は、透視力を持ち、1,000の目で世界をみわたすという天界の王者で雷と暴風雨の神格化とみなされるインドラ神の乗り物であり、王者のシンボルであるばかりでなくそれ自身安定性や知識や豊穡のシンボルでもあったのです。

さて、仏教との関わりからみてみましょう。さまざまな仏教関係の絵画や彫刻に頭を下にして下降する象、雲に乗る象や眠っている王妃のかたわらに横たわる象の画像などがよく見かけられます。これは釈迦誕生にまつわる有名な説話に基づいているのです。釈迦如来が幾多の前世を経て兜卒天(とそつてん)から象の姿で天下りし、釈迦族の浄飯王(シュッドーダナ)の王子シッタールタとして生まれるため王妃マヤ夫人の脇の下から胎内に入ったことを示しているのです。この時、マヤ(マーヤー)夫人は黄金山に住む牙の6本ある小さな白象が体内に入った夢を見たといわれます。この話を聞いた占い師は「あなたはこの世界を支配するか、さもなければ世界を救うことになる男子を生むだろう」といわれ結局釈迦を生んだといわれています。釈迦の誕生を祝う花祭りで白象が飾られるのもこれによります。

ヒンドゥー教の神で学問や文芸の保護者で幸運をもたらしてくれるとして信仰の篤いガネシャは象頭をしています(写真2)。このいわれには多くの伝説が知られています。いくつか紹介しましょう。1つはパルヴァティー女神が夫の神シヴァに湯浴みの邪魔をされないように見張り役として自分の汗と地面の埃(一説では体の垢)から人形を作り命をふきこんで得たガネシャを番人としてドアの警護にあたらせました。シヴァは鬼の大部隊やさらには他の神々の助勢まで受けてガネシャを排除しようとしたができませんでした。そこまでするかという気がしますが、神も人間も意地になると理屈抜きになります。ともあれヴィシュヌ神がうら若き美女を出現させて一瞬ガネシャの注意を引き、その隙に彼の部下がガネシャの首をはねたといわれます(一説では、シヴァ自身が雷電を投げつけ首を切り落としたともいいます)。日本の久米の仙人やギリシャのゼウスの例を引くまでもなく、若い女性の色香に迷う



写真2 象頭のガネシャ神石像(インドネシア)。

のは古今東西人間や神の別なく悲しい男の宿命のようです。ともあれ、これに猛烈に腹を立てた女神は、それらの神々に殴り込みをかけ、より激しい戦闘に突入し世界を破壊しはじめていきます。夫婦喧嘩においても夫からみればささいな事柄に妻が激烈に怒り出し、おろおろすることはよくあることです(これは筆者の家庭内のことではありません。念のため)。彼女はガネシャをもとのまま生き返らせると要求しますが、これは神々といえども不可能なことでした。そこでシヴァ神は折衷案として、神々を各地に使いに出し最初に出会う動物の頭を持ち帰り、それをガネシャの頭に据え代えることにしました。それが象だったわけでそれ以来ガネシャは象頭となったというわけです。

他の伝説では、パルヴァティー女神はガネシャの生みの親とされ、彼がまだ揺籠の中にいた時、神々などが祝福に来たのにシャニという悪魔だけが来ないのにむかつきました。わたしの可愛い赤ちゃんになぜお前だけ敬意を表しに来ないのかという完全な親バカモードです。実はシャニの目で眺められると誰でも灰になってしまうので危害を加えないためシャニは遠慮していたのです。しかし、パルヴァティー女神は『わたしの赤ん坊はそんなことにはなりません』といってついに呼びつけました。案の定シャニの目で眺められたガネシャの頭は炎に包まれ灰になってしまいます(一説では赤ん坊



第4図  
双身歓喜天(長谷川, 2002).

の首が切れてとんでいってしまったともいいます)。こうなっても反省するどころか、自分の子の頭をもとに戻せと要求します。まさに『女子と小人は養いがたし』です(筆者が言い始めたものではありません)。ともあれシャニはこうなつては無理だといいますが、女神は『それなら召使を使いに出して最初に出会う動物の頭を持ち帰るようにさせなさい』と命じました。そして召使は象に出会い、結局ガネシャは象頭で生き返つたというわけです。他の伝説ではガネシャは障害物を取り除く役割を持つとされています。通常小さなネズミ(ムーシャカ)に乗っており、このネズミはいたるところに忍び込めるとされています。したがって、ガネシャ神は商人と泥棒の両方の守護者でもあるそうです。ガネシャ信仰が明確になるのは5~6世紀ですが、このようなこじつげな捏造ともいえる多様な伝承は、じつは象頭の神的存在への信仰が、紀元前の先アリア時代からあったのですが(たとえば、前1200-1000年のイラン西部出土の象頭神のレリーフ)、その後ヒンズー各派が自派に都合のよいように取り込もうとしたことに原因があります。まさに我田引水の結果なのです。いずれにしても、この信仰が日本に渡来して歓喜天(聖天)信仰になったことはよく知られています。象頭身二神の抱き合った特異な歓喜天像は有名です(第4図)。いろいろ面白い話がありますが本文の主旨からそれるので、興味のある方は長谷川(2002)をお読みください。

さて、西洋史においても象とのかかわりは多彩です。例えばローマ時代のカルタゴのハンニバル



写真3 象のテラス(アンコール・トム, カンボジア)。

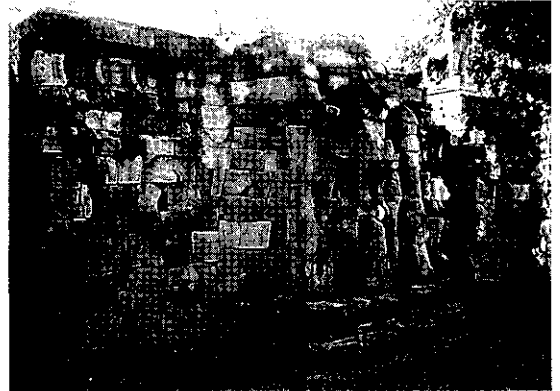


写真4 模式化された象の砂岩製石像(アンコール・トム, カンボジア)。

による第2次ポエニ戦争におけるアルプス越えの遠征で率いられた37頭の象軍です。この遠征はあまり直接の記録が残されておらず、西洋では実際の侵攻のルートがどこであったかなどは高い関心があり、わが国における邪馬台国論争と似ていろいろ研究されています。その課題の1つがハンニバルが率いた象の種類です。ハンニバル自身が乗ってきた一頭を除いて死んでしまったので、それらを埋めたところにその臼歯が残っていれば一目瞭然ですが、確かなものは知られていないのです。同時代に発行されたカルタゴ貨幣の裏面にアフリカ象の図柄が描かれているため(形態的にインド象との違いは明確なので)、アフリカ象が大部分であったとみなされています。しかし、当時カルタゴと親密な友好関係にあったエジプトからインド象をカルタゴに送った形跡も知られており(部外者にはどうでもいいことですが)、議論は尽きません。興味のある方はBeer(1955)をお読み下さい。さて、ローマ



写真5 象の石彫(ボロブドゥール, インドネシア)。

人は象を戦闘に使うことはなく、尊敬と嘲笑を交えて象のことを「ルカニア牛」と呼んでいました。このほか、シーザーがあのか有名な伝言「来たり、見たり、勝てり」を送ったとき40頭の象を一緒にローマに送り、凱旋するとき象を2列に並べた中を行進したとか、1237年フリードッヒ2世がミラノ軍から分捕った戦車を象にひかせて北イタリアのクレモナに入城したなど、歴史上での象との関わりは数多く知られています。

また、種々の彫刻などにも象はでできます。ほんの一例をあげると1181年クメール王国第21代の王となったジャヤヴァルマン7世が建設したカンボジアのアンコール・トム遺跡の王宮手前の広場には「象のテラス」と呼ばれる全長約300m、高さ約3mの砂岩製のテラスがあり、その壁面に群象の浮き彫り彫刻が施されています(写真3)。出陣の際、王様が王宮から「象のテラス」に進み出て階段を降りて象に乗ったのです。周辺にもたくさんのやはり砂岩製の象の彫刻があります(写真4)。

やはり世界遺産であるインドネシアのジャワ島にあるボロブドゥール寺院にも写真5のような象のレリーフが見られ、象が広く親しまれてきたことが伺えます。

もちろん、象と人の関わりは良いことづくめではありません。アフリカ大陸では1970年代に約135万

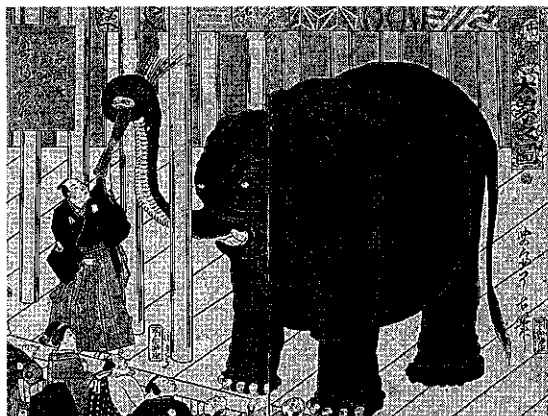
頭いた象が密猟によって1980年代末には60万頭に激減しました。反面、2001年3月、インドを訪れた際、現地の新聞に野生の象が穀物畑を食い荒らし、さらには穀物貯蔵倉庫を襲い村人は耕作する意欲さえ失っているとの記事がありました。今までに約100人も村人が命を失ったということです。今なお、人と象の共存も地域によっては容易なことではありません。

#### 4. 日本と象

歴史時代における日本への象の渡来についてみてみましょう。

「ゾウ」というのは、漢音の訓ですが、古代日本では象のことを「キサ」と呼びました。「キサ」は「刻み」(きざみ)の意味で、木目の文(あや)をいいますが、これは日本に象牙が渡来したとき、牙に木目のような文があったからといえます。源順が10世紀に著した「倭名類聚抄」(略して「和名抄」)では「岐佐」という字が当てられています。したがってともとキサは象牙をさしていましたが、後に象そのものを指すようになったと考えられます。またまた脱線すると、秋田県の日本海側、鳥海山山麓で山形県境を北に越えたあたりに象潟があります。芭蕉の「象潟や 雨に西施が ねむの花」は有名な句です。これは「奥の細道」に旅立った芭蕉が元禄二年(1689)に訪れた時に「裏日本の松島」と称された象潟の景色に感動してつくったものです。当時の象潟は入り江の中に小島の散在する景勝地だったのです。しかし、その約150年後の文化元年(1804)の地震で付近は隆起してしまいました。象牙そのものは、天智天皇十年(671)に、同天皇が法興寺に献納した記録が『日本書紀』にあるので、古くから日本に入ってきていたのでしょう。奈良の正倉院薬物の1つである「五色龍園」は、実はインド象の化石臼歯です。また、文殊菩薩や普賢菩薩ほかの仏の台座(禽獣座)として象の形そのものは知られていたようです。梵語ではゾウをガヤ(gaya)と呼び、中国では「伽耶」の字を当てましたか、この呼び名は日本へは伝えられなかったようで、少なくとも使われることはありませんでした。

生象としては、まず最初は、応永十五年(1408)に南蛮船が若狭国(福井県)に着岸し、足利義持将



第5図 文久二年に渡来した象の興行図(江戸東京博物館蔵)。

軍にインド象1頭を献上したという記録(古事類苑)があります。この象は3年後には朝鮮の李朝へ贈呈(たらいまわし)されました。李朝でも象の扱いは初めてで困惑したことでしょうが、日に豆四斗を与えたとあります(李朝実録)。

天正二年(1574)には博多に入港した明船が虎とともにインド象をつれてきた記録があります。さらに、翌年豊後国(大分県)に来た明船が大友義鎮(宗麟)に象1頭を贈呈しました。さらに慶長七年(1602)に徳川家康あてに象1頭が送られたそうです。しかし、これらの詳しい記録は不明です。

一般民衆にセンセーショナルに実物が知られたのは、江戸時代です。計3回象が海外から運ばれてきています。最初は、享保十三年(1728)にときの八代将軍吉宗の命により今のベトナムのハノイ東に位置するハイフォンから雌雄のインド象を積んだ中国船が長崎に入港しました。メスはすぐに病死してしまいましたが、オスは翌年4月に京の御所で中御門天皇に上覧され、「従四位広南白象」という高い位を与えられました。その後、東海道を經由して各地で人目を集めつつ江戸に到着し、5月に桜田門から江戸城に入って将軍にお目見えしました。その後浜御殿(今の浜離宮庭園)で飼われていましたが、翌享保十五年に民間に下げ渡され、山王祭に象を象った作り物がでるなど大評判となりました。その後寛保二年(1742)に21歳で病死しました。また、少し脱線すると英語でwhite elephantというと無用の長物とか金のかかりすぎるやっかい物の意味になります。この象の骨は中野区中央の宝仙寺



写真6 岡山県六口島の象岩。

の寺宝として保管されているそうです。

江戸時代2度目に渡来したのは、文化十年(1813)にオランダ船によってやはり長崎にもたらされたインド象です。しかし、これは江戸にはやってこず長崎に止まっただけで終わりました。3度目は、メスのインド象で文久二年(1862)で、すでに横浜が開港していた時期なので、アメリカ商船シタン号によってマレー半島南西のマラッカから直接横浜に上陸され翌年から江戸・上方を始め各地で見せ物興行され浮世絵や錦絵に描かれたり、歌舞伎に出たりして大人気を博しました。最後は奈良県で明治七年(1874)に死にました(第5図)。

## 5. 象と石(岩)

それでは本論にはいって石の世界の象について涉猟してみましょう。

まずそのものずばりの「象岩」です。

わが国で最も有名なものは、岡山県倉敷市下津井港の南西約4kmに位置する六口島西岸にある「象岩」で、昭和七年(1932)国の天然記念物に指定されました(写真6)。宝永元年(1704)の池田家文書にも六口島象岩の記載があり、古くから知られていたようです。高さ約7.5mの中粒黒雲母花崗岩塊が風化と波浪の浸食によって象が水を飲もうとする姿勢を思わせることから命名されました。象の鼻に相当する部分にうまく筋が走っているように見えるのは節理です。花崗岩には暗緑色の斑点が見られますが、これは閃緑岩質の包有物です。こうした瀬戸内海沿岸に分布する深成岩は広島型花崗岩類に属し、約8,000～9,500万年前頃の白亜紀後期に



写真7 三重県紀伊長島の象岩(森下, 1979).

形成されたものです。前述したようにこの頃はまだ地上に象は出現していません。もちろん人間もいません。後から名付けたに決まっています。

このほかにもいくつか象に囚んだ岩が各地にあります。

三重県の紀伊長島町の海岸沿いは白亜紀(ここでは約1億年前)の四万十層群の堆積岩が東西走向、北傾斜で分布しています。頁岩・砂岩の互層からなっており、浸食の程度が違います。ここに「象岩」があり、鼻の部分は海食洞によって形作られています(写真7)。

長野県の「寝覚めの床」は大正十二年(1923)、当時の内務省によって史跡名称天然記念物に指定された奇勝で、浦島太郎がこの風景が気に入り住みついたとの伝説があります。上松(あげまつ)花崗岩の岩盤を木曾川が浸食してできた地形で、花崗岩の方状節理と罅穴(ポットホール)によって、奇岩が連続し、それらの形状になぞらえた色々な命名がなされており、「象岩」もその1つです。上松花崗岩(苗木・上松花崗岩)は、白亜紀末期の中～細粒の黒雲母花崗岩を主とし、斑状花崗岩・花崗斑岩・粗粒花崗岩・アプライト質花崗岩などの多様な岩相を呈します。石英が自形で、黒色を呈するのが特徴です。

滋賀県甲賀郡甲南町の南西端で三重県阿山町との境に位置する岩尾山およびその周辺はいわゆる山陽帯の花崗岩が分布しています。この花崗岩は白亜紀後期の中～粗粒黒雲母花崗岩からなっています。岩尾山は、延暦年間に最澄が開山したといい、修験道の霊山として栄えました。山頂部の伊勢神宮を正面にする位置には巨大な「お馬山」があり、またの名を「象岩」といい、寺と神社の配置

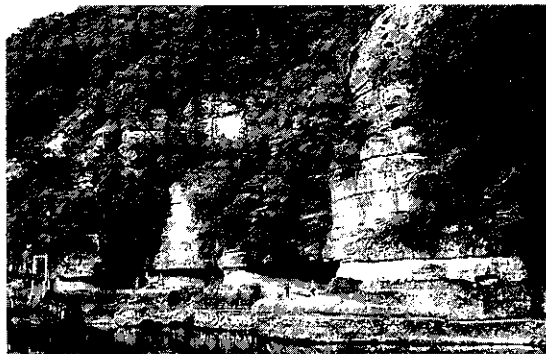


写真8 福島県「塔のへつり」の景観(山元孝弘氏撮影)。

は神仏習合時代を忍ばせるものです。元禄年間(十七世紀)ここを訪れた芭蕉の句「行く春を淡海の人とおしみけり」の碑があります。ついでにいうと中腹の息障寺せきしょうじの付近には、「マンダラ岩」「金縛り岩」「金かけ岩」「屏風岩」など多くの奇岩があります。

山形県米沢市峠の姥湯温泉は、薬師森山(1,538m)南東麓、前川の峡谷にあり、天文二年(1533)の開湯だそうです。この湯は、含硫化水素酸性緑ばん泉で、木片や木の葉を浸しておくとう温泉沈殿物が付着して半年で化石のような状態になるといいます。この付近に「白象岩」がありますが、このほか獅子岩・姥岩・虎岩・観音岩・蜂巢岩などもあります。これらは新第三紀中新世後期の姥湯溶結凝灰岩という流紋岩～デイサイト質の溶結凝灰岩からなっています。熱水変質を受けて白色化していることが多く、そこから名付けられたものでしょう。

福島県会津郡下郷町白岩付近では溪谷美で知られる大川ラインが探勝できます。大川は栃木県境の荒海山あらかいやまを水源として阿賀川に合流する延長約60kmの川です。JR会津線の塔のへつり駅で下車して、この大川沿いを散策すると塔のへつり層の一部であるシルト岩～頁岩・粗粒凝灰岩互層および軽石凝灰岩・凝灰角礫岩などからなる岩壁が浸食されて塔状の地形をなしているのが見物できます。これら全体を「塔のへつり」と称しています(写真8)。「へつり」とは「険しい山道」の意味です。特に塔のへつり付近は、陥没カルデラを充填した礫・砂・シルト岩からなり、一部デイサイト火砕岩を挟む後カルデラ期湖成堆積物が分布し、従来は鮮新世

とみなされていましたが、最近の研究では前期更新世とされています(山元, 1999)。河川の下刻による浸食を受けた塔状の各岩塊に「舞台岩」とか「鷲頭岩」とかさざまな名前がつけられており、その1つに「象塔岩」というのがあります。

さて、象の最大の特徴といえば、なんといってもその長いお鼻です。象牙を支える頭部の重量が500kgに及び、長く太い脚を持つ以上、長い器用な鼻がなければ水を呑んだり、草を食べるのも不自由で生きのびれなかったことでしょう。そもそも長鼻目という分類項目もここに由来するのですから、石の世界でも当然この特徴に目をつけています。

山梨県大月市を貫流する桂川にかかる高月橋付近の河原に露出する新第三紀の緑色酸性凝灰岩に猿橋溶岩流が重なった岩塊が浸食を受けたものを見立てて「象の鼻」と称しています。去年から富士山地域で深部低周波地震が頻発し、今後の火山・マグマ活動となんらかの関係があるのではないかと関心を集めています。富士山のハザードマップをつくる試みが進んでいます。過去の火山活動を知る上でその噴出物の詳細な状況を知ることは不可欠です。猿橋溶岩流は、狭義の富士火山を構成する新富士火山噴出物の中で最も古い旧期溶岩類の1つで、特に遠方まで流下しているものです。おもに5~10mm大の灰長石~曹長石の巨晶を含むかんらん石玄武岩からなっています。

石川県輪島市輪島崎町の鴨ヶ浦海岸は、JR七尾線輪島駅の北方約2.5kmの輪島崎突端に位置する東西約400m、南北約150mにわたる海岸です。鴨ヶ浦の湾入部分は、新第三紀前期中新世の柳田累層の砂岩泥岩互層が分布し、比較的なだらかな海岸線を描きますが、東側の岬部分は断層関係で後期中新世の石灰質砂岩が分布し、さらに西側の岩石海岸には、中期中新世の道下礫岩層が分布しています。いずれも海食による差別浸食を受けてきた様々な奇岩があり、その1つが「象の鼻」と呼ばれています。

四国のほぼ中央部を東西に走る仏像構造線という断層の南側の地帯を地質学的に四万十帯と呼び、さらに南北に二分されます。北帯にはおもに白亜系が、南帯にはより新しい第三系が分布します。



第6図 タッシリの象岩(週刊新潮連載「ひとつの旅」69より図化)。

南端部に近い高知県土佐清水市の龍串見残し地域には、新第三紀中新世の三崎層群が発達しています。この地層は、上方粗粒化の傾向のある浅海成層でもおもに砂岩・泥岩やその互層からなっています。多くの生痕化石や堆積構造(化石蓮痕など)が知られています。海岸部でやはり浸食の影響が大きく、様々な奇岩が形成され、その1つが「象の鼻」と呼ばれています(山本, 1976)。

さて、一方、外国にも象岩はあります。アフリカのアルジェリアのサハラ砂漠東端、ホガール地方観光の目玉である7,000年前に描かれた数々の動物の壁画で有名なタッシリ近郊にある差別浸食による奇岩の一つは、高さ約4m近くあります。数千年前からある自然の造形物というのですが、写真で見ると限りではあまりにもリアルな象の形です(第6図)。

中国桂林市民主路の「象山公園」の中心は象鼻山です。鼻と足の間の円形の浸食洞窟(水月洞)は、宋代の北処士による水月洞詩に「水底に明月有り、水土に明月浮かぶ、水流れるも月去らず、月去るも水なお流れる」とうたわれています。

KARO Hirokazu and ENDO Yuji (2002): Stones named after giant animals (part1).

<受付: 2002年10月3日>